**「ラーマクリシュナの福音」勉強会　第４３回　（２０１８年　４月１０日）**

**・第４３回の勉強範囲：「第一章　師と弟子」１５，１６頁**

**信仰の道（バクティ）によって罪を取り除く**

*もし人が神への信仰を持っていれば、たとえ彼がもっと邪悪な罪―雌牛かブラーミン\*か女を殺すというような―を犯したとしても、その信仰によって間違いなく救われるであろう。*（１５頁上段L７～９再読）

とても深い信仰があったら、神様は罪を取り除いてくださる、という話が前回から続いています。

**雌牛、ブラーミン、女を殺すことは大罪**

**①雌牛**

インドでは雌牛を女神と考えています。なぜなら雌牛からミルクが出ます。ミルクから、バター、カッテージチーズ、ギーも作られます。ギーは儀式の時にとても大事です。それでヒンドゥ教徒は雌牛をとても尊敬しています。

**②女性**

ヒンドゥ教の聖典では、女性は母なる女神の化身とされています。ですので女性を殺すことは男性を殺すよりも罪が重いのです。西洋とヒンドゥ教の社会では女性の立場が全然違います。西洋では奥さんはだんなさんにとって友達のようですね。立場が対等のようです。ヒンドゥ教の社会では女性は尊敬される立場です。しかし、ヒンドゥ教の聖典の中にその考えがありますが、ふつうの人にその考えがなくひどい扱いを受けたこともあります。

**③ブラーミン**

ブラーミンはとても神聖で霊的な人のことです。ですので、その種類の人を殺すととても大きな罪を犯すことになります。

雌牛、女性、ブラーミンを殺すほどの大きな罪でも、もし神様への信仰があったら、神様の恩寵ですべての罪は取り除かれます。なぜなら神様だけがその力を持っているのです。その種類の信仰があれば、後悔も心配する必要がありません。

**ギャーナ・ヨーガ（知識の道）で罪を取り除く**

罪を取り除くにはもう一つの道があります。それは知識の道です。

ギャーナ・ヨーガを実践する人は、形のある神様を信じません。アートマンを信じています。ブラフマンを信じています。

例えば人を殺すとき、体を使います。感覚、心、知性、自我を使って人を殺しますね。しかし、

**ギャーナ・ヨーガでは「私は体ではない」と識別をして、自分を体や心と非同一します。そして本当に非同一でき、自分はアートマンだと感じることができると、その人は前の罪を取り除くことができます。**

ここで、気を付けないといけないことは、見せかけだけの識別で、自分の都合のいいときだけ「私はアートマン」と考えても意味がないということです。例えば罪を犯したときだけ体と自分を非同一して、私ではなく私の体が罪を犯した、と考えるのは浅い考えです。食事の時も、すべての瞬間において、自分と体を非同一していなければなりません。たとえ悟っていなくても、かなり修行が進みますと、その状態になることはできます。もちろん簡単ではありませんが。

**都合のいいときだけ自分と体を非同一する例（学者が雌牛を殺す話）**

あるところに学者が住んでいました。彼の家の庭はとても広くて素晴らしい庭で、彼はいつもその庭の手入れをしていました。あるとき、そこに一頭の雌牛が入りこんできて、庭の植物を食べてしまいました。学者は庭にとても執着がありましたから、たいへん怒って石をその雌牛に投げつけました。運の悪いことにその雌牛は石にあたって死んでしまいました。学者は「私は大変な罪を犯してしまった」と思いました。

〔牛を殺した罪〕は人間の形をして、学者の前に現れました。〔牛を殺した罪〕は、牛を殺した学者の中に入ろうとしていたのです。しかし学者は〔牛を殺した罪〕に、「その雌牛は私が殺したのではありません。私の手が殺したのです。だからどうぞインドラ神のもとに行ってください」と言いました。なぜならインドラは手の神様の一つですから。（インドでは体の部分によって、いろいろと神様がいるのです）

〔牛を殺した罪〕は、インドラのもとへと行き、事情を説明すると、インドラは「ちょっと待ってください」と言って人間の形になりました。そしてインドラは学者の庭へ行きました。人間の姿のインドラは庭をとても眺めて「おお、とても素晴らしい庭ですね。どなたの庭ですか」と聞きました。学者は「私の庭です」と答え、うぬぼれをもって庭をあちこち案内しました。そして死んだ雌牛のところまで来てしまいました。インドラは「ああ、この雌牛は誰が殺したのですか」と聞きました。そのとき庭の持ち主である学者は何も答えられませんでした。なぜなら、先ほど庭の持ち主が誰かと聞かれたときに「私」だと答えたのに、雌牛を殺したのは「私ではなく、私の手です」というのは、矛盾ですから。そのとき人間の姿をしていたインドラは本当の姿で現れて、「お前は悪いやつだ」と言いました。そして〔牛を殺した罪〕に、学者の中に入るように言いました。

・📖 （読む）「師と弟子」１５頁下段Ｌ６～Ⅼ９

*ナレーンドラを指して、師はおっしゃった、「みんな、この子を見てごらん。彼はここではごらんのとおりにふるまっている。いたずらっ子も父親のそばにいるときにはたいへん温和に見えるものだ。しかしチャンドニ\*で遊んでいるときには、彼はまったく別人だ。*

（解説）

ナレーンドラとはスワーミー・ヴィヴェーカーナンダがお坊さんのなる前の名前ですね。チャンドニは、ドッキネッショルにあるシュリー・ラーマクリシュナのお庭でオープンスペースです。

スワミージーもブラフマーナンダジもそのころはまだとても若かったので、友達と一緒に外で元気に遊びますでしょ。タクールの前では、まじめにふるまっていても、外で遊んでいるときの様子は全然違うことをイメージしてください。

**ニッテャ・シッダ**

・📖 （読む）「師と弟子」１５頁下段Ｌ９～Ⅼ1１

*ナレーンドラや彼のタイプの人びとは、つねに永遠に自由な魂という階級に属している。*

（解説）

**永遠に自由な魂とは、ニッテャ・シッダ**のことです。

**シッダ：今生で悟った人**

シッダはサンスクリット語で「悟った人」のことです。悟るためにはたくさんの実践が必要ですね。カルマ・ヨーガ、ギャーナ・ヨーガ、どちらでもいい。しかし、たくさんの実践が必要です。ときどき一回の命では無理です。何回も何回も生まれ変わって、その間ずっと実践をして、今生でやっと悟った人のことをシッダと言います。シッダは今生で悟った人で、前世では悟ることができませんでした。

例えば、アベダーナンダジはニッテャ・シッダではなく、シッダでした。アベダーナンダジの出家前の名前はカーリー・プラサードです。１７歳くらいのときに彼が初めてドッキネッショルでシュリー・ラーマクリシュナに挨拶をしたとき、シュリー・ラーマクリシュナは「どこから来たの？　なぜ来ましたか？」といろいろ尋ねました。カーリー・プラサードは「私はヨーガを学びたくてやってきました」と言いました。それを聞いてシュリー・ラーマクリシュナは「あなたは前世でとても偉大なヨーギーでした。しかしあなたは前世では悟れませんでした。私はあなたにヨーガ修行の奥義を授けます」と言いました。これはカーリー・プラサードが前世ではまだ悟っていなかったという証明となりますね。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　☞（『真実の愛と勇気』234頁L6,7参照）

**ニッテャ・シッダ：永遠に完全だが、神様を助けるために生まれる**

ニッテャの意味は「永遠」です。そしてニッテャ・シッダでのニッテャの意味は、前後関係で、「前から悟っていた」という意味です。前世も悟っていた。ずっと前の生でも悟っていました。

ここで疑問が出ます。悟るということは解脱と同じですから、もう生まれてこないですね。では、

**ニッテャ・シッダはなぜ、悟っているにもかかわらず何度も生まれ変わるのでしょう**？

答えは、**神様の仕事を助けるため**です。

神様はこの世界に人間を導くために現れますね。神様の化身として、イエス、お釈迦様、ラーマクリシュナ、などの姿で現れます。その神様を助けることがニッテャ・シッダの務めです。

神様はこの世に、人生を導く、つまり平安の道、幸せの道、悟りの道へと導くために現れます。その仕事は一人ではできません。神様を手助けする存在が必要です。それだけでなく、神様は言います。「たとえ私が本来の場所に戻っても、あなたが生きている間はあなたの存在で私の仕事を続けてください」と。

例えばイエスの12人の弟子がそうです。お釈迦様にもアーナンダなどの弟子がいました。シュリー・クリシュナにも弟子がいました。シュリー・ラーマクリシュナにもいましたね。その種類の人がニッテャ・シッダです。

**シュリー・ラーマクリシュナのニッテャ・シッダの弟子たち**

シュリー・ラーマクリシュナは、もともとはとても強い人でしたが、12年間という長い間厳しい修行をした結果、体がバターのようになり、たくさん歩くことも難しくなりました。お腹も弱くなりました。シュリー・ラーマクリシュナはシュリー・チャイタンニャのようにインド中をあちこち歩いて人びとを導くことができないことを悲しく思いました。そのためにスワーミー・ヴィヴェーカーナンダが必要とされたのです。スワミージーは、インド国内だけでなくアメリカやヨーロッパまで行きましたね。彼はニッテャ・シッダでした。シュリー・ラーマクリシュナには16人の直弟子がいましたが、そのすべてがニッテャ・シッダだったわけではありません。シッダの方もいました。

**出家直弟子の中では、スワミージー、ブラフマーナンダジ、プレーマーナンダジ、ニランジャナーナンダジ、ヨーガーナンダジ**がニッテャ・シッダでした。**在家直弟子では、バーヴァナート、プールナー**がそうでした。全部でたぶん6，7人がそうでした。

・📖 （読む）「師と弟子」１５頁下段Ｌ９～Ⅼ２２

彼らは決して世間に巻き込まれない。もう少し年をとると内なる意識の目覚めを感じ、まっしぐらに神に向かって行く。彼らはただ、他者を教えるためだけにこの世に来るのだ。この世の何ものにも関心を示さない。決して『女と金』に執着しない。

*ヴェーダ\*にはホマ鳥のことが書いてある。それは空高くに住み、そこに卵を産む。産み落とされると同時に卵は落ちはじめる。しかしそれは大変高いところなので、幾日も幾日も落ちつづける。落ちながらそれはかえり、ひなになる。ひな鳥は落ちる途中で目があき、翼が生える。目があくと自分が落下しており、地にぶつかればこなごなになることを悟る。それで、ただちに空高くにいる母鳥をめざして上昇しはじめるのだ」*

*ここでナレーンドラは部屋を出た。*

（解説）

ニッテャ・シッダは決して世俗的なものには執着しません。執着があるように見えたとしても、一時的です。すぐに自分の本性を理解して、神様以外のことは考えなくなります。例えばブラフマーナンダジは結婚をして子供も生まれましたが、一時的で、すぐに神様のことしか考えられなくなりました。

・📖 （読む）「師と弟子」１５頁下段Ｌ２２～１６頁上段Ⅼ２１

*ケダール、プラーノクリシュナ、およびMを含むおおぜいが残った。*

*師「ね、ナレーンドラは、歌に、楽器の演奏に、学問に、そしてあらゆることにすぐれているのだよ。このあいだ彼はケダールと議論をし、彼の論旨をずたずたに引き裂いた（みな笑う）。*

*（Mに）推論について書いた英語の本があるかね」*

*M「はい、ございます。ロジックと呼ばれております」*

*師「そこに書いてあることを話しておくれ」*

*Mは少し困った。彼は言った、「その書物の一部は、一般的なものから特殊なものへの推論を扱っております。たとえば―すべての人は死ぬ。学者たちは人である。それゆえに学者たちは死ぬ。*

*もう一つの部分は、特殊なものから一般的なものへの推論を扱っております。たとえば―このカラスは黒い。あのカラスは黒い。私がどこで見るカラスも黒い。それゆえにすべてのカラスは黒い。*

*しかし、この方法で結論で得られた結論には誤りがあるかもしれません。調べたら、どこかの国に白いカラスがいるかも知れないのですから。もう一つのたとえがございます―もし雨が降れば、そこには雲があるか、またその前から雲があった。それゆえ雨は雲から降る。*さらにもう一つのたとえは―この男は三二本の歯を持つ。あの男は三二本の歯を持つ。われわれの見るすべての男は三二本の歯を持つ。それゆえ人びとは三二本の歯を持つ。イギリスの論理学はこのような法と法を扱っております」

（解説）

演繹型の論理と、帰納型の論理について少し説明します。

演繹型論理　deductive logic

すべての人間は必ず死にます。あの人は人間ですから必ず死にます。それが演繹型の論理です。

帰納型の論理inductive logic

このカラスは黒い。あのカラスも黒い。私が見たすべてのカラスは黒い。だからカラスはすべて黒い。

この論理には間違いがあることはわかりますね。例外もありますし、自分が見たことがないだけかもしれないですから。

**神様のこと以外は考えらない**

・📖 （読む）「師と弟子」１６頁上段Ｌ２２～Ⅼ２３

*シュリー・ラーマクリシュナは、この言葉をほとんどきいておられなかった。きいているうちに忘我の状態にお入りになったのだ。*

（解説）

Mさんには推論について話してほしいとシュリー・ラーマクリシュナに言われたので、説明しましたが、シュリー・ラーマクリシュナはその話に興味が持てなかったようです。なぜなら、

**シュリー・ラーマクリシュナは神様のこと以外に興味がない**からです。

**ミツバチとハエ**

ミツバチは花にしかとまりませんが、ハエは花にも汚いものにもとまります。我々は時々神様が好きですが、時々世俗のことにも興味があります。まるでハエのようです。しかし、シュリー・ラーマクリシュナはミツバチのように、神様にしか興味がありませんでした。

**いつも無限のことを考えているので、小さなことにフォーカスできない例**

**①顕微鏡を見られないシュリー・ラーマクリシュナの例**

シュリー・ラーマクリシュナの時代に顕微鏡が発明されました。シュリー・ラーマクリシュナは子供のような好奇心から、顕微鏡をのぞいてみたいと思いました。ある信者が顕微鏡を持っていましたので、シュリー・ラーマクリシュナのところに持っていきました。しかし、シュリー・ラーマクリシュナは見ることができなかった。なぜなら、

**シュリー・ラーマクリシュナの心はいつも神様、無限のことを考えています。**

**無限のことを考えている心を顕微鏡のような小さなものにフォーカスするのはとても難しかった**からです。

ブラフマーナンダジにも同じような例があります。

**②細かなことにフォーカスできないブラフマーナンダジの例**

ブラフマーナンダジがラーマクリシュナ僧院のプレジデントだった時の話です。運営のための取締役会が開かれるとき、ときどきブラフマーナンダジは「今日は無理です」と言いました。また、プレジデントとして書類にサインをしなければならないのに「今日は無理です」と何回も言いました。ほかの人はとても困りますね。あるときブラフマーナンダジは「私の心はいつも無限のことを考えています。だからそこから引き戻して、小さな世俗的なものに集中することは難しいのです。今日は自分の名前のスペルも書けません」と率直に言いました。それくらいいつもいつも無限のことを考えているのです。

ブラフマーナンダジはときどき人をからかっていましたが、それは無限から引き戻すためです。そうしないと生きることができないからです。

（第43回福音勉強会　以上）